左野博陽（国語教育コース）

学 問 と は 何 か

１．教育を考える一言

「学問とは、ただむづかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽しみ、詩を作るなど、世上に実のなき文学をいうにあらず。」

２．背景

私は東北大学文学部で、日本思想史という専攻に所属し、社会のためになるのか世間から疑問を抱かれざるを得ない学問を修めていた。このような世間の見方に対し私は「役に立とうが立つまいが知ったことか、社会などどうでもよいわ。」とひねくれ、何の目的もなく、自分の心を埋めそうな本を読んでいた。実なき文学を学ぶことの意義をとくに気に留めてもいなかった。

そのようななか、私は福沢諭吉の『学問のすゝめ』でこの言葉に出会うこととなった。この言葉を見ても最初はなんとも感じなかった。しかし、それは私の心にしこりのように残り、実なき文学などどうして国語で教えるのか、そういうことを考えるようになった。

３．考察

この一文だけから判断すると、福沢の言う文学はいかにも国文学専攻で扱うものが中心である感じがする。しかし、実は文章を主体にした学問全体のことである。また、この文章ののち「かかる実なき学問はまづ次にし」と言っているのだから、けして全否定しているのではない。しかし、文章中心の学問は実学に劣るのだろうか、これを教育することは後回しでよいのだろうか、私の専攻であった思想・哲学を中心に考えてみたい。

私が考える哲学や思想を学ぶこととは、身の回りの世界を別の観点から観る、ということである。よって今の社会の価値観に疑問や生きづらさを感じている人にとって、哲学や思想は助けとなる（特定のものにどっぷりつかると危ないが）。また、実学だけを学ぶより思想や哲学を学べば視野の拡大にもつながる。アメリカの大学で副専攻があるのもこういう意図であるように思う。以上の理由から、けっして軽視されるものではないだろう。

しかし、文章を主体にした学問が実学に劣らないとまではなかなか言えない。やはり実学あっての学問であると考える。ただ、教育することを考える際、実学だけでなく、こうしたものを学ぶことで、社会で何とか生きていける生徒もいるのかと思う。わたしはその数が少なくないと感じているし、そういう生徒の存在が文章中心の学問を教える意義となるだろう。国語を教える中でいろいろなものの見方を与えていきたい。

参考文献
福沢諭吉著　伊藤正雄校注『学問のすゝめ』講談社、2006 年